

親子そば三人客  
泉鏡花作

—

花まきを一つ、と誂へて、縞の羽織の片手を懐に、  
右手で焼落しの、最う灰になつた大火鉢をぐい、と  
引寄せながら、帳場格子を後にして整然と坐つた、  
角帯に金鎖を見せた客があつた。彼是十二時に近い  
頃、雨上りの春寒い晩である。

「まきを一、」と媚かしい聲で通したが、やがて  
十能に眞赤なのを堆く、紅の襷がけ、圓く白い二の  
腕あたり惜氣もなう、效々しく、土間を蓮葉にカラ  
ノ、と突かけ下駄で持つて来て、鐵火箸を柄長に取  
つて火鉢にざっくり。

面長で色白な、些と柄は大いが、六か七と見えて  
あどけない風、結綿の鬚がよく似合ひ、あらい紺の  
前垂して、立働きに繕はず、衣紋の亂れたのも初々  
しい。嬌態もなく眞直に立つて、火を入れるのを見  
て、

「おゝ、難有う、」と忙しく兩手を翳した、客は

此の節一寸々来て見知越なので、帳場に坐つて居た、女房が愛想をいふ。

「飛んだお寒うございますねえ。」

「寒いッて何うも、」

「妙なお天気でございます。」

「然やうさ、」といひかけて、火鉢の縁に頬杖した、客はフト心付いたやうに、自分と斜向に、其は入口の、一間破れた障子を背。上框に腰をかけた、左足を土間一杯に踏伸し、銅色の艶々と、然も瘡せた片足を前はだけにぐいと折つて、踵で臍を壓するばかり、斜に肩を落して、前のめり、坐睡すると見ゆるやう、左利の拇指と、人指を割つたのに、薄手の猪口を挟んで、肘を鍵形にしゃツちこぼらせ、貧乏揺ぎといふ、總身をゆすぶつては俯向いたまゝ、猪口を鼻の頭で押つけるやうにして酒を嗅いで居る親仁があつた。これを見て、目を返して、いま引返さうとする娘が、襟脚の雪のやうに鬢の浮いた、撫肩の、雙子もしなよく、すらりとした後姿を、

「あゝ、姉さん、」

「はい、」とあでやかに振返る。

「一合正宗をつけておくれ。」

「お君や、熱くしてお上げ申しな。」

「はい、はい、」

母親と客へ二ツ返事で、お君とい、ふ娘、向をかへると手を上へ、一寸爪立つたが、眞暗な棚の、貼札を正面にやらんでゐる、罫の中から一本抜いて、直ぐ下の板の間へ、無造作に十能を差置いて、小刻に、やがて、煤けた柱で劃つたやう、磨硝子を嵌めたる如き、湯氣のむら／＼として、洋燈の朦朧とある中へ見えなくなる。

彼處に父親が居て、其のかゝりで、

「かけ一上、」と口早也。

「あいよ、」

直ぐに娘は盆を据ゑて、片手を振りながら、臺所の曇つたやうな中仕切の敷居を跨いで、結線に結んだ手柄の色、鮮麗に露れたが、此の註文は別に一人。

入口に極近く、障子に肩の觸れるばかり、悄れた状して、羽織も着ないで、頬被をして居たらしい、なえた手拭を項に絡いて、身を窄めて居た壮佼で、顔を灯に背けたから、年紀の頃よく分らず。

「お待遠様、」

と出したのを、黙つて請取つて、腰のあたりへ引  
着けたまゝ茫乎。

「おや／＼おや！」

帳場から、

「父上！」

「何うしたの、」と娘もばた／＼、何につけても  
忙しい、壱岐殿坂下のおやこ蕎麥と看板に記して、  
夫婦と娘ばかり、男も使はず、近所の出前は親仁が  
受持つて、留守の内は板前を母親が預る、娘が給仕  
の共稼ぎ。

店も座敷も八畳の上り口の此の間一ツ、積んだ蒸  
籠を床飾にして、客は五人だときツしり立込む程、  
内端な商賣、勿論こゝが親子三人の閨にもなる。

けれども加減をよく食べさせて、種ものゝ種を惜まず、トンと腕を鳴した、打方の緊の好さ。かい撫のもりかけ屋に澤山類がないと、土方、日雇取、大工、仕事師、造兵のお職人などが味ひ覺えて、透の無い繁昌に、めつきり仕出し、未だ出来上りはしないが、つい月はじめから、金方なしに二階の普請にかゝつた位。

亭主が懸聲の大きに、女房も帳場を立つた。

「何の、今お爛を上げようとする、鑊がお前、ポカと斜ツかけに破ツたらうぢやないか。零も残らず、釜の中へ打ちまけよ。はら、芬々して居ら、湯の中で暢氣なものだ、人の氣も知らねえ奴さ。」

「希有だねえ。」

「父上、ひゞが入ツてたんでせう。」

「それにしても湯は恚う温いんだからな。」

「まあ、何しろかはりをおつけよ、早くおしよ。」

といつておいて、女房は帳場に直つた。

「相濟みません。」

「御一所でなくツて不可ませんが、何うぞ召上り

まし、お待遠様でございました。」と娘が詔を土間から其へ。

火鉢を一寸押遣ツて、

「可いとも。」

「おう、娘さん、」と此の時、又嘗の猪口をひツたり盆に置いたが、糊で附着けたやうに未練らしく指も放さず、杉の丸箸が松葉に散ツて、井の蓋は桐一葉、親仁は苦々しい眉の顰んだ、然もトロンコの顔を上げて呼びかけた。

「お銚子？」と派手な聲、既に四本ばかり並んだり。

「いんや、澤山だ。」と強く首を掉ツて、がツくりとうつむき、斜に股のあたりへついた手を、膝頭へのめらせて、一ツ肩を揺つた。

「待ちねえ、待ツてくんねえ。」

一調子ドス聲を高らかに、

「待つてくんねえよ、」と内懐へ手を入れたが、ふツ／＼と向うさまに息を吹いて、しばはらくして「え」と、恚うだに因つて、「と、よろけ縞の唐

棧の羽織の兩方の袖口を引いて 左右に二つ三つ扱くと、襟を返して、うしろへ脱ぎ、腋の下を潜らして、中央を掴んでするりと前へ引いて二をした。

「おう、何だぜ、」といひさま細い赤大名の雙子の、寝皺は奇つたが、未だ新しい、艶のある裕に三尺をしめた姿で、土間へツイと立上つて、

「都合があるからね、おい、これを預けて行かあ、ねえ、おい、」と二足三足。

親仁が寄せて來るので、娘は鈴のやうな目を二つて襷がけの其のあらはな手で、前垂の端を取つたまゝ思はず退る。

「都合があるからね、済みませんがね。」

「あゝ、もうし、」女房は帳場の中で、片膝立てた。

「眞個に濟まねえ、ウイ、濟みませんでござえす、ござえすが濟みませんでござえすが、ござえすがね。」

ほつと呼吸して、

「私あね、三崎町だ、三崎町のね、おい、藤助ツてもんです。此の何だ、町内の頭に聞いて見ねえ、知ツてら、懇意です、直に何すら、ねえ、おい。」

「お次手でよろしう、」と夫婦ほとんど一所に聲

をかけたが、亭主姿は見えず、女房は一寸面を背けた。

娘はじつと見て居るのである。

「お次手でよろしう、何、お次手で、」と藤助ぐつたりと尻を下し、

「可かあねえ、よくねえです。憚ながら、濟むもんかい。そんなことをして濟むと思ひますかい。

え、濟むめえ、相濟むめえが、ヤイ、何うだ、姉や、」

突かゝりさうな劍幕に、帳場から、

「何の貴客……お君や、」

此方へ、と目くばせする、母親の顔を見て微笑んで、

「可いわねえ、母様。」

「可かありませんてことさ、フム、」と打棄つたやう、海鼠に首があらば此の形さ。

客は其の容子とイんだ娘の顔を上下に打視め、

「突然だが、お前さん、お金子なら何うかしよう

ぢやあないか、何も御縁さ、」

帳場に捻向いて、早や手を懐中へ、

「おかみさん、私が立かへて置ませう。」

「まあ、旦那、」

「滅相な、」と調子はづれに、向うから爛の出来た一疋を、亭主は不作法に引搦んでのツこり出て来た。布子に、これも襷がけ。半股引を穿いた、およそ五段目の定九郎が、山賊頭巾で、揚幕を出た頃の蕎麥屋の風と見て可也矣。

繕ふ處更になく、

「へい、」と客の前へ突出して置いて、娘に並んで、藤助の傍に寄り、手はかけぬが、肩の上へ、掌を開いて腰を屈め、

「えゝ、もし、心持を悪くなさらねえで、一ツ勘

定を踏んでおくんなさるわけにやあ行くめえかね。」

「何を、」

「いゝえさ、腹をお立てなさらねえで、何うでございませう。御都合はまゝあることなり潔白に然うやつて形を置いて行つて遣らうとおつしやる、其のお心は讀めました、讀めましたが相談でさ、唯た今ソレ罫が破れて酒がこぼれたですが、内の奴も希有なこツたといひまさ。」

此處で私も心持が悪くツてなりません、吉左右だとは誰が考へても思へますまい、いや、詰らないことでもあると氣になりますわ。處を一ツ勘定を踏んで下さりや、はゝあ、今夜これだけの損のゆく、其の前兆であつたにして、さて、さらりと事済み、何うでございませう。え、もし、」

「馬鹿に、馬鹿にしがんない、誰だと思ふ、誰だと思ふ藤助だ。恚う、藤助を誰だと思ふ、」深く憤つた風もないが、だらしもなう纏れかゝる。

ト白けて皆が黙りの折から、ぞろヨリノゝと高い音、此の時まで伸して居た、件の影のやうな壮伎が、思ひ出したやうに啜つたのである。

「御主人、ともかくもまあ、其の事は氣にしな  
いが可い、壊れた分は私が買った分にして、代を拂  
ひませう、別に。で、私が買ったものとするりや、お  
前さんが心持を悪くするにも當るまい。何うです。」

「飛んだことをおつしやる、勿體ない。」

「そして何しようぢやあないか、一つ其の方のも  
立かへて上げようぢやあないか。」

「忽ち大音聲、」

「誰だと思ふ、藤助だ、鏝なしの藤じるし、」と  
半から極低聲、と聞くと急に聞き直つて、細い目を  
見据ゑながら、

「恚う／＼、内の亭も、餘所の旦那も、可い加減に  
しろい。勘定を踏んでくれの、立かへるのと好きなこ  
とをいはあ。藤助だ、さあ。藤助だ。恚うなりや、  
さあ、手前處の太打が鼻緒に化けても  
踏まねえよ。情婦が富鬮に當つてもかけらだつて達  
引かせねえ。天が二杯よ、一、二、三、四い、銚子  
が五本だ。取つといてくんねえ、斷つて預かつてく  
れ、え、おい、斷つてのこつた、」

「でもさ、」

「眞個にお次手で可うござんす。」

「かみさん、おかみさん、おい、かみさんや、女の癖に無勘定なことをいふない。慥う、聞きねえ。女房は家のかためなりけりさ、聞きねえ、女房は家のめツかちよ、なあ。お前さんは兩眼明かだ、しかも佳い年増だ、佳い年増で居て、見ず知らずの野郎を達引いて濟むかい。」

はゝあ、さては、お前密男をしてやあがるな。」

「ほゝほゝ、」

先刻から他愛なく、莞爾々々して酔どれの状を見ながら、餘念もなう、其の管を聞いて居た、お君は兩親が、今のあまりの雑言に齊しく色を變へたにもかゝはらず、およそ堪らないと言つたやうに、

「まあ、松助にそツくりだよ。嬉しいねえ、」と擦寄つたが、いきなり唐棧の羽織を請け取つて、手にのせると、肱のあたりがヒヤリとした。

「おゝ、冷い、雨にあつたの、母様預つて置きませう。」

「へい、お値段を此處で、」といつて、件の壮佼はフイと立つてがらりと戸をあけた。立てかけてあつた、番傘がはずみで、ばツさり。見向きもしないで、影が消えたやうにボンと出た。

「誰だ、おねだんを此處へなんて言ふなあ、誰だ  
い、へん、己が名は藤助でえ。」

「藤助、」

「や、」

「本名皮剥の庄兵衛、」

「御用だ・・」

「ウム、」

「神妙にしろ、」

「おゝ、先刻蕎麥屋で背後に居た、」

「夜中に羽織を取りに行つて、戸をあけさせて押

込まうと、強盗品玉の材は上ツたぞ、覺悟しろ、唯

だ一人だが、鐵三郎だ。」

「旦那、まあ、御覽なせえ、」とビクともせず、

内懷から、取出して、片手業で紙包、開いて掌に据

ゑたのを、眞砂町の原の角あたりから、一筋の赤い

虹の如く、暗を貫く瓦斯燈の灯に、唯見れば美しい半

襟であつた。

「馬鹿といや、まア馬鹿でごせえすがね、あんま

り娘の罪の無さ。短刀で威したら、蟲がかぶらう、

俳優だと思つて嬉しがるか、どツちにしても仕事は

出來ねえと、狙つた的をフイにして、土産を持つて、  
寝ねえうちに、これからね、羽織を取りに引返す處  
でさ。

旦那、たゞ此のまんまぢやあ不可え、私も庄兵衛  
だ、唯今一立廻やつつけやすぜ、天命なら仕方がね  
え、お前さんの手柄になせえ。

しかし旦那、お職掌だから御無理はねえがね、考  
えて御覧じろ、私が痛めつけたツて、たかゞ金子だ、  
働きや譯なしさ。も一人居た野郎なざア、いやに見  
せひらかしやあがつて、あいら、娘を狙ひまさ、疵  
ものにされた日にや、取返しがつくものぢやねえ。

可哀相に私のやうな悪黨せえ、涙が出るやうな可  
愛らしいものを、慰まうといふ善人が世の中にや澤  
山ありまさ、そいつらにも些と氣を配つて、庇つて  
遣つておくんねえ。

はて、何處へ、持つてく土産だらう、「と水を飲  
んだより一層醒めた、酒の名も知らぬらしい、苦み  
走つて引しまった、頬のあたりに微笑を含んで、其  
の半襟を帯のあたりへ突込む、と思ふと、鐵三郎は  
颯と退いた。

冷龍一躍、三寸ばかり閃いて、疾く手にかゝつた

捕縄は、端短にプツリと切れた。

「お前さんは未だ少いや。」

トタンに衝と寄る、背後へ飛んで、下富坂の暗の

底へ、淵に隠れるやうに下りた。行方知れず、上野

の鍾。

【完】